

2023 年 11 月 5 日（日）「拡大する賛美」

ヨハネの黙示録 5:11-14

11 また、私は見た。そして、玉座と生き物と長老たちとの周りに、多くの天使の声を聞いた。その数は千の幾千倍、万の幾万倍であった。12 天使は大声でこう言った。「屠られた小羊こそ、力、富、知恵、権威、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です。」13 また私は、天と地、地の下と海にいるすべての造られたもの、そして、そこにいるあらゆるものがこう言うのを聞いた。「玉座に座っておられる方と小羊に、賛美、誉れ、栄光、そして力が、世々限りなくありますように。」14 四つの生き物は「アーメン」と唱え、長老たちはひれ伏して礼拝した。

【序論】

私たちは礼拝者となり、「賛美」という特別な営みにあずかるようになりました。「特別」と申しますのは、賛美とはただ「歌を歌う」とか「楽器を演奏する」とことは違う、無類の「異質さ」を有しているからです。これは、音楽を愛する者として特に感じることであり意識していることではありますが、その音楽の向かう方向が世俗の音楽とは異なるのです。歌謡曲に最も多く表されるものは「恋心」でしょう。愛する対象への純粋な心だけでなく、歪んだ愛までもが歌い上げられ、それに共観を覚える人々もいます。愛の対象は「人」だけでなく、ある土地や風景、あるいは故郷への思いとして表現されることもあります。一方、歌のない器楽曲には、それを通して作曲者が表現しようとしている何らかのテーマがあり、中には技巧の追求へと向かうものもあります。難解な作品を弾きこなすことは、演奏者の栄光ともなる。このように、音楽の可能性は無限大ではありますが、その中でも「賛美」というものは、その向かう方向性が「神」であり、人間のへりくだった心を表すものでありますから、恋心とも技巧とも全く異なるものなのです。歌詞とメロディのうちに信仰が表され、演奏するに当たっても自己顕示ではなく神を愛する心がそこに表現されなくてはならない。その意味で、不純な動機が取り除けられたものが作られ演奏されることが求められるのです。この点で世俗の音楽と一線を画す難しさがあるのではないかと私は考えています。

【本論】

今日の箇所には壮大な「天の賛美」が出てきますが、その向かっている方向性に注目しながら読む必要があるでしょう。

本論 1. 無数の天使による賛美

また、私は見た。そして、玉座と生き物と長老たちとの周りに、多くの天使の声を聞いた。
その数は千の幾千倍、万の幾万倍であった。(5:11)

神の玉座を中心として、その周りを飛び交う四つの生き物、更に整列している二十四人の長老たち、その周囲を「**多くの天使**」が取り巻いていました。まるで太陽系を廻る惑星のように、限りなく広がりゆく大合唱団。天使の数についての「**千の幾千倍、万の幾万倍**」という表現は、数学的な「百万」とか「億」を意味するのではなく、数えることもできない大きな数字を表すときに用いられた修辞学的表現です。それほど多くの天使が存在するということに驚かされますが、今は想像するほかありません。似た場面としては、主イエスが誕生されたときに羊飼たちに現れた御使いによる大合唱を思い起こすことができるでしょう。

すると、突然、天の大軍が現れ、この天使と共に神を賛美して言った。「いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」（ルカ 2:13-14）

この時と同じ御使いの軍勢をヨハネも見ただのではないのでしょうか。

天使は大声でこう言った。「屠られた小羊こそ、力、富、知恵、権威、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です。」（5:12）

この賛美の内容で注目すべきは、キリストについて「**屠られた小羊**」という称号が与えられていることです。小羊は動物の中でも最も弱く、「力」とか「権威」とは無縁の存在でしょう。しかも、屠られた小羊であるならば尚のこと、抵抗もできず無残に殺された「弱さの中の弱さ」というイメージを抱かせます。主イエスは「神の小羊」として十字架上で屠られ、贖いの代価としての死を遂げられました。しかし、聖書は逆説の書、そのような最も弱い姿のうちに「王の王、主の主」であるキリストを見出すのです。

ここには「**力、富、知恵、権威、誉れ、栄光、そして賛美**」という7つの言葉が出てきますが、個々の意味を分析することはそれほど重要ではなく、地上では主イエスの内に隠されていた強さと完全性が、天においては最大限に栄光として現れていることが表されています。主イエスがなぜ「**屠られた小羊**」として誉め讃えられるか、私たちは自分の言葉で説明できるようにしておきたい。

- ・ 主イエスは本来「神の子」として現すことのできた栄光を、人として地上の生涯を歩まれたときにはグッとご自身の内に隠しておられた。
- ・ そればかりか、地上では十字架という極刑により栄光とは真逆の死を遂げられた。
- ・ しかし、その十字架に至るまでの神への従順により、神の国の栄光を受けられた。
- ・ 神の国では、地上で最も低くなられた方こそ最も高められる。

本論 2. 全被造物による賛美

また私は、天と地、地の下と海にいるすべての造られたもの、そして、そこにいるあらゆるものがこう言うのを聞いた。「玉座に座っておられる方と小羊に、賛美、誉れ、栄光、そして力が、世々限りなくありますように。」（5:13）

「**玉座**」から水面に波紋が広がっていくように、「四つの生き物」→「二十四人の長老」→「天の軍勢」と賛美の輪が拡大していきましたが、その賛美を受けて更に「全被造物」がそれに呼応します。「**天と地、地の下と海にいるすべての造られたもの**」「**そこにいるあらゆるもの**」

とは、贖われた世界が、一切のものを回復させてくださった主イエスに対して感謝の声を挙げています。この地上にあっては、被造世界は人間の罪によって呻き苦しんできましたが、世の終わりには主イエスが万物を贖い、壊れたものを本来あるべき姿へと戻してくださる。まるで、縄目に縛られていた囚人がその鎖を切られるかのように、解放が与えられる。

被造物は、神の子たちが現れるのを切に待ち望んでいます。被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させた方によるのであり、そこには希望があります。それは、被造物自身も滅びへの隷属から解放されて、神の子どもたちの栄光の自由に入るという希望です。実に、被造物全体が今に至るまで、共に呻き、共に産みの苦しみを味わっていることを、私たちは知っています。(ローマ 8:19-21)

近年、遺伝子改変技術の進歩と問題点が指摘されています。DNA の 2 本の鎖を切断してゲノム配列の場所を削除したり、置き換えたり、挿入したりする技術が進んできています。それによって、哺乳類ばかりでなく微生物に至るまでゲノム編集が可能になり、私たちが見たこともない生物が次々と生まれてきてもおかしくない時代となりました。農作物においても、新種の開発のために放射線の照射によって突然変異をもたらす技術が既に使用されています。私たちがノーマルだと思って日頃からふれている世界は、裏ではどうなっているのでしょうか。生物の生態系に人間が手を加えるということは、果たして創造者の意思に適合しているのか。このような世界は一体どこまで進んでいくのでしょうか。パウロですら想像もしなかった世界が今広がっているのかもしれません。

主イエスの贖いは、万物に解放をもたらすと約束されています。その対象の中には私たち人間も含まれている。

被造物だけでなく、霊の初穂を持っている私たちも、子にさせていただくこと、つまり、体の贖われることを、心の中で呻きながら待ち望んでいます。(ローマ 8:23)

この人生の中で主イエスと出会い、罪から贖われ、神の子とせられた私たちは、既に回復の御業の中に置かれていますが、最終的にはすべての罪と苦悩から解放される日を見ることになるでしょう。私たちの弱い肉体も栄光のからだへと造り変えられ、罪とは無縁となり、歪みなき心で神を礼拝できるようになる。私たちもまた、その日を夢見ているのです。

本論 3. 賛美と礼拝の応酬

全被造物が歌っている賛美の内容に注目しましょう。「玉座に座っておられる方と小羊に」とありますように、賛美の対象は父なる神様と主イエスの両者となっています。これは、小羊イエスがまさしく神に等しい方として崇められていることを意味します。

次に、ここでは「賛美、誉れ、栄光、そして力」と、先の 7 つの言葉のうちの 4 つだけが出てきています（「富、知恵、権威」は省略されている）。理由はよく分かりませんが、王としての小羊イエスの支配と栄光に焦点が置かれているようにも見えます。

四つの生き物は「アーメン」と唱え、長老たちはひれ伏して礼拝した。(5:14)

被造物の賛美を受け、今度は「四つの生き物」と「長老たち」がそれに応える。このようにして、玉座と小羊を中心に、広範囲に渡って賛美と礼拝の応酬がなされています。まるでこだまするかのように賛美の大合唱が連なっていく。そして、それはきっと重なれば重なるほど豊かなハーモニーを織りなしていくのでしょう。

この天の礼拝の光景は、現在に生きる私たちとどのような関わりがあるのでしょうか。私たちの賛美が真に「玉座と小羊」に向けられたものであるならば、この天の礼拝の一部をなしているはずなのです。賛美に私たちの全霊を込め、神に喜ばれる美しい響きを天に伝えたい。そんな思いをもって礼拝に参加し、ベストの賛美をささげたいと思います。

【結論】

黙示録が書かれた時代、教会が直面していた苦難は熾烈を極めていました。帝国による大迫害の只中であって、民は恐れ、身を潜めて生きていました。指導者は捕えられ、投獄され、殉教し、流刑に遭う者、強制労働に従事する者もいました。そんな過酷な状況下であってさえ、彼らは賛美をやめなかったのです。自分たちの賛美が天の礼拝とつながっていることを強く実感していたのでしょう。私たちも、どんな時代を生きようとも、天の礼拝と一つとなった賛美を歌い続けたい。地上で守ることのできる主日礼拝の回数は限られていますが、その一回一回を大切に、「玉座と小羊」とを思い浮かべたいと思います。

【祈り】

永遠に賛美されるべき天の父なる神様。地上であって、天の礼拝の光景を垣間見られる幸いを覚えます。私たちが今ささげる賛美が、天上の賛美と一つとされていることを感謝いたします。この世にあっては困難がありますが、どのような状況下にあっても私たちの口から賛美を取り去ることのできるものはありません。主イエスが傍に立って私たちの礼拝を導き、この週もすべての時間をあなたのものとして歩むことができるようお助けください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

玉座より地の果てまでも広がる賛美を、隅々まで聞き届け給う、父なる神の愛、
変わり果てた被造世界を贖い、創造の御業を完成に至らせ給う、主イエス・キリストの恵み、
地上の礼拝を、天の礼拝と一つとなし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。